

## イチゴの高品質輸送を可能にする個別包装容器

わが国のイチゴ栽培面積は、6,500ha 程度とそれほど大きいものではありません。しかし、総産出額でみると 1,500 億円にも達し、お米、畜産物に次いで大きなものとなっています。近年では、大粒で良食味の新品種が次々に育成され活発な生産・普及の取り組みが進められています。主な産地としては、栃木県が全体の 20%程度、福岡県・佐賀県・熊本県・長崎県がそれぞれ 10%程度を占めています。12～2 月の冬期間でも 5～10%程度、3 月以降の春期間では 10～15%もの流通ロスが発生しているとの報告もあり、産地からは損傷発生を軽減する流通技術の開発が強く求められていました。そこで、イチゴの表面がどこにも触れない状態で固定・包装でき、輸送中の傷みを軽減することができる個別包装容器を開発したので、その概要を紹介します。

### ☆技術の概要

1. 開発したイチゴ用個別包装容器は、上フタと下フタの一辺が連結された二枚貝のような形状をしています。容器の一部でイチゴの果柄を把持することにより、容器内で安定的に果実を固定することができます。
2. 本容器の材質は、コストや耐久性などを考慮し、食品用として一般的に利用されているPET材を採用しています。本容器のサイズは、長さ 55mm×幅 60mm×高さ 65mm で、40g 程度のイチゴに適しています。
3. 輸送時の損傷程度を、トラック輸送では 2 段詰め包装形態と、宅配輸送では平詰め包装形態と比較する試験を実施しました。いずれの場合も、本容器はイチゴの損傷程度を軽減できることが確認されました。
4. 5℃での貯蔵試験の結果、本容器内に収容したイチゴの質量減少率は抑制されており、果実部分のみならずヘタの萎れや褐変などの変化も少なく、外観品質は良好でした。



図1 個別包装容器



図2 二枚貝のような形状

### ☆活用面での留意点

1. 本容器に収容できるイチゴのサイズは、品種や形状によって異なります。
2. ほ場でイチゴを直接容器に収容することもできますが、収穫後、作業場などで適したサイズのイチゴを選別し容器に収容する方法が効率的です。
3. 本容器は、農研機構生研センターで開発し、その後、容器メーカーとの共同研究を経て実用化をめざしているもので、平成 26 年度中に市販化される予定です。(連絡先：農研機構生研センター048-654-7000 (代)) (農研機構生研センター 貝沼秀夫)